

## 助産師と産科医タッグ

### 「パースセンター」福岡・苜屋に

家庭的な雰囲気でも赤ちゃんを産みたいけれど、何かあったときは高度医療にも頼りたい。そんな妊婦の思いをくみ、助産師と産科医が手を組んだ新しいタイプの助産所「九州パースセンター」が、6月に福岡県苜屋町にできる。売りは「安心と安全の両立」だ。容体急変の場合はただちに、設備の整った病院で産科医が対応できる態勢を整える。

### 6月設立

遠賀川河口のほど近く、約1千平方メートルの敷地に、木造2階建て家屋の建設が進む。中には畳張りの分娩室と5床の

入院施設をしつらえる。福岡県苜屋町事務局長(46)によると、イメージは「古事記」に登場する「産屋」という。「響

灘の波の音を聞きながらリラックスしてお産に臨んでもらいたいのです」通常の定期検診はパースセ

(井上知美)

ンターで受ける。血液検査など最多3回の検査は、5日ほど離れた福岡新水巻病院(同県水巻町)の周産期センターで。正常なお産が望めるなら助産師と相談して計画を練り、分娩室で出産。多胎や逆子などリスクが高い場合や、お産途中で異変があったときは、周産期センターに移る。検査や緊急時に周産期センターで対応するのは、パースセンターの発案者でもある斎藤竜太医師(44)。「自然なお産がしたいという女性は多くなっているし、産科医は減る一方だからこそ、助産師

の力を生かしたかった」と話す。これまで急患の妊婦が、医師や助産師の判断ミスで搬送が遅れて危険な状態で運ばれてきたり、肝心の受け入れ側の病院が正常出産の手当でに追われていたりするケースもあった。「助産師の判断力を磨き、危険と分かたらすぐに移送できるようにしたうえで、正常出産は助産師に任せたい。カルテを共有していけば緊急時も素早く対応できる」。将来は、パースセンターで助産師の研修もできるようにしたいという。

## 信頼関係ある すみわけ期待

日本助産師会によると現在、全国に助産師は約2万7千人。産科医不足が深刻になり、お産の場を確保するかが握る存在になっているが、病院から独立した助産院を続けたら新設したりするのは難しくなってきた。

厚生労働省は08年6月、「安心と希望の医療確保プロジェクト」で助産師をもっと活用すべきだとし、支援を始めた。ただ、対象はあくまで病院や診療所の中の「院内助産所」や「助産師外来」

だ。

医師の指導下に置かれがちな院内の助産所とは違う環境をつくること、助産師が集まって助産所を立ち上げようという動きが各地で出ているが、07年春から嘱託産科医や連携医療機関の確保が医療法で義務づけられたこともあって、条件を満たすのに苦労するケースは少なくない。九州パースセンターの開設に、静岡県立大の松岡恵教授(母性看護学)は「助産師と産科医が情報を共有し、信頼関係のもとで双方の『すみわけ』が進むなら望ましいこと。根づかせるためには地域の支援も必要だ」と話す。